トーマス・マンの「ヨゼフとその兄弟たち」における時間の問題（2）

——「ヨゼフ物語」を中心として——

深　沢　恒　男

この論文では，前回の「魔の山」から「ヨゼフ物語」へという形で追求した直線としての時間と，円としての時間の対立克服が，神話形式への進展になる経過から，今度は神話形式の時間問題に示める位置と意義を見出そうと試みている。更にこの神話形式が物語構成と，教養的な意図といかに密接な関係にあるかを論じ，併わせてこの神話形式の限界をも考察しようと企てている。

「ヨゼフ物語」はすでに聖書の27章から35章にわたって，その元になる物語がみられる。従ってどのようにトーマス・マンがこの物語を解釈したかが重要な問題となる。＜神話の市民化＞とはこのような内容を含んでいる。ここでこの小論の著者が前もってあやまっておきたいのは，聖書に対する無知から聖書には全然ふれていないことである。それ故トーマス・マンの解釈に全てをおぶさった。このことは又文学作品はそれ自体独立したものという著者の考えからでもある。

〔I〕

「過去という泉は深い。測りがたいほど深いといってもよいのではないだろうか？」（JB, Ⅲ, S.5.）。これが15年間もかかったトーマス・マンの大作「ヨゼフとその兄弟たち」（1933～1943）の第1巻「ヤコブ物語」（1933）の序章の最初の部分である。この序章において，作者は我々を神秘な無時間性の世界へいざなって行く。ヨゼフやヤコブより古いアブラハムに，更にノアに，更に又古くという風に，測り知れぬ神秘の底へ人々を誘い込んで行く。所でここに不思議なことには，ヨゼフに起ったことはすでにヤコブにその先例が見られるし，ヤコブに起ったことはアブラハムに，アブラハムに起ったことはノアに，という具合に我々の身の上に現在起っているような事柄が，すでに遠く過去に，その原型がみられるのである。

例えばヨゼフは弟であるのに兄達を差置いて，父の寵愛を受けるのであるが，この型はすでに父ヤコブが弟であるのに，兄エサウを差置いて父の祝福を受けるのに似ているし，それは又前のイサクとイシマエルの関係でもあるし，更にもっと前のアベルとカインの関係でもある。そして面白いことには，ヨゼフの二人の子，マナセとエフライムに対しても，ヤコブは弟のエフライムを右手で，兄を左手で祝福するのである。又ヨゼフは兄弟の憎しみを受けるのであるが，これもヤコブがエサウの，イサクがイシマエルの，アベルがカインの憎しみを受けるのに似ている。更にヨゼフは兄弟に売りとばされ，エジプトに下って行くのであるが，この型もすでにヤコブがエサウの怒りを恐れて，ラバンのもとに逃げて行くのに似ているし，エジプトに下ることさえ，すでにその先例がアブラハムに見られるのである。このように昔の先例をたどって，どんどんと先に進んでいったら，どのようなことになるのであ

ろうか？　もはやこのような過去は歴史的過去などという浅いものではなくなっている[1]だろう。このように見てくれば，我々のやっている事は過去にその先例がみられ，その型を＜くり返し＞ているにすぎなくなる。我々の自我は過去の原型にもとずく＜くり返し＞なのだといってもよかろう。「彼の自我は以前の彼方にある者の原型の中に溶解していたからであり，又一方このかってあった自我の原型が，再び彼の肉体の中で現在化し，自らの生立ちにふさわしい形でくり返しを試みている」（JB, Ⅲ, S. 183.）。このような解釈はトーマス・マンの「フロイトと未来」（1936）でも語られているが[2]，深層心理学の影響が強かった。そして「魔の山」でもみられた模倣と同一視の問題に，この作品では更に自我と超自我の問題を加えることにより，根源的なものを追求し，生の解釈を得ようと努めている。

神はこの物語では精神性を現わすものとして示される。そして神自体がひそかなる欲望にかられ，肉の姿をとりたいと望んでいるのである。「精神的超世界的な世界神が，魔術的な，感覚的な民族神や部族神と自分とを比較してみると――もっと感覚的な香料を加えてみたいという功名心を目覚めさせる。崇高ではあるが，いささか貧血的な精神普遍妥当性などは放棄して，肉体的存在を獲得し――」（JB, V, S. 17.）。その期待から「精神が魂の世界に完全に入り切ることによって，両原理が互に浸透し合い，各々が各々によって浄化され，天上からの祝福とともに，下界の深みからの祝福も併わせて，人間存在を現実化する」（JB, Ⅲ, S. 45.）。

このような神の期待から生じたのがヨゼフであった。従ってヨゼフは「肉体と精神，美と知識とが同居して，両者が相互に強化し合っていた」（JB, Ⅲ, S. 409.）。それ故ヨゼフは二つのものの原理を統一するという使命を初めから持っていた。「ヨゼフ物語」では肉体と精神，美と知識とかの対応が数多くみられるが，「魔の山」でみられたような二律背反の緊張した対立は，ヨゼフの使命からして分るようにすでに解消されていた。この作品にあらわれる二重のものの対応を図式化してみれば，精神と魂，天上と下界，太陽と月，未来と過去，夢と現実，神と人間，光と暗黒，生と死，男性と女性等の対応があげられる。これ等の対応したものの合一は直線的な過去・現在・未来といった時間関係からでは解決出来ず，球体的[3]なもののなかで合一される。「球体は補充と対応とにある。――地上で起るほどのことはすべて又天上でもくり返され，天のことは地にも現われるといったように対応しつつ，全体としてまとめられている」（JB, Ⅲ, S. 186.）。所でここでいう球体的なものとは何か？それこそ「更に古く」とか「くり返しくり返し」とか「もっともっと以前に」とかの過去の泉に深く深く下りていって求めたもの，「魔の山」でも論じられて来た円としての時間，＜くり返し＞としての時間[4]である。「この過去の無限性が神秘の性格をもつのは，その本質が直線ではなく，球体であるという点である。直線には神秘はない。神秘は球体の中にある」（JB, Ⅲ, S. 186.）。

すでに論じて来たように球体は神秘をもつが，＜Einst＞[5]という言葉も又二重の意味をもつ神秘の言葉である。つまりこの言葉は「Wie alles war und Wie alles sein wird」（AG, S. 355.）の両方の意味をもつからである。

物語作者にとっては過去こそ「要素であり酸素」（JB, Ⅲ, S. 49.）となる。「我々の生命もすでに深くこの過去に属している」（ibid., S. 49.）。この生命は死によって初めて得られる。「死とは時間の喪失であり，時間の外に出ることであり，その代りに永遠と遍在とが得られるのである」（ibid., S. 49.）。生命の本質は現在に属し，「いまここで」（ibid., S. 27.）

という形[6]で現われるが，生命の本質が「過去及び未来の時称で語られるのは，その神秘が神話の形で語られる場合に限る」(ibid., S. 49.)。「神話とは秘密の衣にすぎない。しかし秘密の礼服は祝祭であり，くり返されるものであり——」(ibid., S. 50.)。従って神話は「いつの世にも」(ibid., S. 27.)という形で現われる。このことは原型に応じてくり返されるということの別の表現にすぎない。

所で私はこの小論で時間問題を論じているのであるが，前回の論文から通じて時間を大きく分け，直線としての時間と円としての時間という形で論じて来た。だが「魔の山」の中でもみられるように，感覚にもとずく主観的な時間も存在していた。単調な日々の為に，時間感覚が喪失して，1月が，1年が瞬時の間に過ぎ去ってしまう時間である。この感覚的時間に対応される客観的な時間が新しく「ヨゼフ物語」で登場してくる。この時間は生きている者を全部含めてしまう大きな時間なのである。客観的な時間ではあるが，決して直線的な時間と結びつくことなく，円としての時間とかたく結びつき，大きな視野をもったものとして働いている。「明るい気持であろうと，ためらっていようと，それは問題にはならない。生きている者はすべてその流れに身をまかさねばならない」(JB, Ⅲ, S. 265.)。この物語自体がすでに大きな時間の中につつまれている。というのも「この物語が初めて語り手によって物語られる前に，物語がそれ自身を物語った」(JB, Ⅳ, S. 342.)からである。円としての時間が大きな客観的な時間と結びつくことにより，単に個人的な問題だけでなく，人類共通の普遍的問題が論じられるようになる。神話は円であり，くり返しである。更にこの神話は大きな時間と結びついて，普遍的，典型的[7]なものをめざすようになる。神話の市民化とは二重のものの統一であり，同時に古典主義的な典型化が方法論と結びついて，物語構成上からも，この神話の市民化は重要なテーマとなっている。

〔Ⅱ〕

丁度「魔の山」の主人公ハンス・カストルプが西に傾いた太陽をみながら，同時に東から登りゆく月をも眺める[8]と同じように，このかわいらしい，口達者で，うぬぼれ屋のヨゼフも「西へ傾いた双生児座に微笑を送り，視線を東方に転じ，乙女座の——」(JB, Ⅲ, S. 57.)をするのだった。この星座こそトト(Thot)の獣帯だったのだ。彼には「父方からの授かりものと母方からの授かりものとの間を代理する者，仲介する者として，太陽の力と月の力とを上手に調和させて，昼の祝福と夜の祝福とを面白可笑しく和解させる為」(JB, Ⅲ, S. 106.)の使命が生れながらにして与えられていた。二重のものの対応を同時に和解させる力，あらゆる物のうちに類似や照応を見出していく力は，この父方と母方からの血のつながりによって得られたものであった。従って兄弟達に井戸の中へ投げ込まれ，奴隷としてエジプトへ下って行くのも，神のひそかな期待，肉体と精神，生と死，未来と過去等の合一の期待を担ってなのである。

このようにしてヨゼフが死者の国[9]であるエジプトへ下り，又新しく生れ変わるという形は，引き裂かれた後で生れ変って神となるタムツ＝オジリス＝アドニス神話(Tammuz＝Osiris＝Adonis＝Mythos)とまったく同じである。ヨゼフも兄弟達によって母の形見のヴェール(die Schleier—Ketônet)を引き裂かれた(ヴェールを脱ぐことは死の観念と結びついている[10])後で井戸[11]へ投げ込まれ，エジプトへ下ったが，そこでヨゼフは名前を変えてウザルジフ(Usarsiph)[12]，つまり「死せるヨゼフ」となった。更に長い年月の後，高い位に登

り，人々から「養い人」(der Ernährer) といわれるようになった。すなわち Tammuz＝Osiris＝Adonis 神話の型は，ヨゼフにおいては Joseph＝Usarsiph＝Der Ernährer 物語という型になるのである。天上にある事柄が地上でもくり返されたわけである。そして又タムツ神話にしても，元が人間の話であるのだから，これは地上のものが天上のものになったというわけである。更にヨゼフが話術，計算が巧みで，文字が上手であり，死の国へ連れてこられた諸事情を考えれば，ヨゼフこそトト＝ヘルメス神（Thot＝Hermes）の似姿なのである。事実ヨゼフもこの神を意識して，自らこの神をまねる[13]ことになる。

所でこのヘルメス神であるが，トトとしてでなく，プシコーポムポス（Psychopompos）としては「死者すらも，月の国へ連れて行くし，夢までも案内する」(JB, V, S. 158.) が，この神はすでに「魔の山」でもあらわれて来ている[14]し，「ヴェニスに死す」(1913) ではアッシェンバッハをして破滅へ導く[15]きっかけをなすものになっている。「ヨゼフ物語」では大きな鼻に，小さなマントをおおった姿[16]で当場し，自らの使命を「使者，道案内，番人」[17]と語った。「ヴェニスに死す」では団子鼻で，灰色のマント[18]を着ている。このようにヘルメス神はプシコーポムポスとしてはもっぱら死の国への道案内という役目が主要なものとなっている。それ故「ヴェニスに死す」のアッシェンバッハは死の国であるヴェニスに連れてこられ，美少年タデツィオ（Tadzio）の美に幻惑されて，ついには死を招くのである。「ヴェニスに死す」ではヘルメス神がトト神と結びつかず，プシコーポムポス神とのみ結びついている。このことは又神話の市民化とは二重のものの統一であり，典型化をめざすものであるが，「ヴェニスに死す」ではそれが問題視されていないことに密接な関係がある。つまり円としての時間が問題となる段階にはない訳である。「魔の山」ではヘルメス神がアポロ (Apollo) とデイオニュゾス (Dionysos) という対立[19]で現われる。前にも述べた如く「魔の山」ではすべての二律背反が対立したものとして現われ，それを統一する期待がハンス・カストルプにかけられているが，まだ実現はされなかったのに対し，「ヨゼフ物語」のヨゼフはもう生れながらにして，二重のものの対立を同時に見る眼がそなわっていた。従って「魔の山」ではアポロとデイオニュゾスの両原理の合一は夢の場面でしか成し遂げられないのに，「ヨゼフ物語」ではアポロとデイオニュゾスという関係が，ヘルメスという一語でおさまるのである[20]。このヘルメスという言葉こそ二重のものの統一を示すものなのである。更にヨゼフは「タームとトウミム」(JB, V, S. 239.) という言葉が好きだが，これも又 Ja と Nein，光と暗黒，生と死等を同時に示す言葉なのである。

タムツ＝オジリス＝アドニスという天上の物語は，地上ではヨゼフ＝ウザルジフ＝養い人の物語になることはすでに述べたが，この関係は単に今まで述べて来たような時間の関係だけでなく，教養的テーマ[21]も含んでいる。ヨゼフがエジプトへ下るのも「身を移しておくこと・身を立てること・後から来させること」(JB, Ⅳ, S. 65.) を実現する為であった。ききんで困っている父や兄弟達を救う為に前もって送られたのである。死についても同じことがいえる。死はタムツ神話にもみられるように，人間再生のきっかけをなすものであるが，このことは，一方において時間のテーマと，他方において教養的なテーマと密接な関係にあることを示している。死は，時間のテーマからすれば，時間の喪失であり，永遠を得るものであるが，教養的なテーマからすれば，新しき未来の為の＜つまずき＞になっている。

〔Ⅲ〕

夢のもつ予見的な性格については「魔の山」においてもすでに数カ所でみられた。「雪」の章で見る総合への道に達する大きな愛の夢，第1章の後半でみる従兄のヨーアヒム・チームセンが死体となってボブスレーで運ばれてくる夢などである。夢をもって作品の中に大きな役割を占めさせているのには，ニーチエ及びフロイトの影響がみられる。というのもアポロ的原理とは造形的性格のみならず，予見的な性格を持つものであり，夢の予見性と夢の無意識性は表裏一体をなしているからである。この予見性とは言葉から判断されるようにすでにして未来の言葉を見てとるのである。それに対し無意識性は通常の意識作用から離れた時，それまで奥に深く秘められたものが，意識の表面にあらわれてくるものである。それが過去の回復であり，自我を超えた超自我ともいうべきものの実現なのである。従って人は夢によって未来と過去を一瞬の内に読み取るのである。これが円としての時間，くり返しとしての時間であることは論じる必要がなかろう。「魔の山」ではハンス・カストルプが夢見がちな青年になっているが，「ヨゼフ物語」ではヨゼフは単に夢見がちな青年になっているのみならず，夢の持つ予見的な性格を良く理解しているのである。このことは「魔の山」では直線としての時間と円としての時間の対立緊張感が生じており，従って円としての時間のみによって全編を構成するまでには至らず，暗示的に提出するに留まっていたが，「ヨゼフ物語」では円としての時間による物語の構成を試みている。主人公ヨゼフの性格のみならず，物語をも構成しようという企てなのである。

ヨゼフはすでに彼の運命を夢の中で見てしまっている。それは穴の中に落され，神様が助け，見たこともない人達の間でもてはやされるという夢[22]である。ヤコブもラケルとの結婚を前にして，だまされて姉のレアと結婚させられる出来事を暗示的に夢の中[23]で見てしまっている。それから又ファラオが夢[24]を見る。この夢はヨゼフが解き，出世するきっかけとなる重要な夢であるが，神が未来の計画をファラオに示したものであった。所で夢に対してもつヨゼフの著しい特徴は，ヨゼフが夢を見るだけでなく，夢を同時に解くことが出来るという才能なのである。「夢を見る者はそれを解くこともしますし，夢を解こうとする者は夢を見た経験がなければなりません」(JB, V, S. 84.)。「魔の山」のハンス・カストルプも夢を見るが，解くことは出来ないし，ファラオも又そうである。夢を見る者であり，同時に夢を解くもの，これも又二重のものの対応であり，円としての時間によるヨゼフ像構成の結果なのである。夢を見る者は夢の中にあって，夢を外側から眺めることは出来ない。それに対し夢を解く者は夢を見る者の外側に立たねばならない。夢を見る者は内側であり，夢を解く者は外側であるのだ。外側とは内側にあるものを距離をおいて眺めるものである。内側に立つ者を市民と置けば，外側に立つ者は芸術家である。更にこの関係は，創作対批評，生対死ともおかれる。このように夢をめぐってのトーマス・マンの解釈には，彼の初期からの問題意識の結晶化が見られる。

更に夢を見るヨゼフにはこの物語の進行状況もすでに理解されていた。このことはヨゼフが彼自身の物語の中にあるだけでなく，物語の外に立って眺めることが出来ることも示している。「人は物語を理解していなくとも，物語の中にいることが出来るでしょう。恐らくそうあるべきで，私がいつもそこで何が演じられたかをあまり知りすぎていることは罪深いことでした」(JB, V, S. 554.)。物語の中にしっくりとはめ込まれ，自分自身の物語を知らない

で生きて行く人間，これは又夢を見るだけの人間でもあり，一般市民なのだ。それに対し物語の外側に立ち，物語の進展をすでにして知っている人，これは市民に対して強い憧れをもち，やましい良心をもった芸術家の姿でなくてなんであろうか？　このヨゼフの姿は作者自身の姿でもあった。「物語作者は物語の空間ではあるが，しかし物語は物語作者の空間ではない。むしろ物語作者は又物語の外部にもいる」(JB, Ⅳ, S. 165.)。

この夢は又物語構成に関しても重要な役割をはたしている。「魔の山」ではすでに述べて来たように夢について語っている個所は少く，時間についての問題が夢というものに形象化され得ず，なまのままで，＜時間についての考察＞という形で提出されていた。従って物語に対する作者の介入という形でなされたのであった。これは物語の叙事的性格を冒す危険が多分にあった。たしかに「魔の山」が時間感覚のない場所であり，それに慣れたハンス・カストルプ自身も時間感覚を喪失し，年月が瞬時のうちに過ぎ去るという，彼の内的体験を主にしている点では＜時間についての考察＞と密接な関係にあるが．しかしこれも諸人物，諸事象と時間との親近性を語っているのみで，全体の物語の流れ，つまり筋の進行との関係は薄いものとなっている。それ故数章にわたって，最初の部分で時間がいかに物語と関係あるかが，論じられねばならなくなっている。それに対しこの「ヨゼフ物語」ではなまの形で＜時間についての考察＞が提出されてはいない。そのことは一方においては直線としての時間と円としての時間の対立がなく，従って円としての時間のみで構成されているということと，他方においては時間がなまの形でない夢という形で問題となり，この夢が諸人物，諸事象と密接な関係にあるのみならず，筋の進行とも不可分のものとされているからである。夢によって前もって物語の流れが分ってしまう。これにより未来が現在の中へ流れ込み，現在あるものは又過去のくり返しにすぎないので，全体が幾層にも入り組んだものとなり，時間の喪失による永遠が得られている。それ故作者の介入によって物語の流れを乱すという危険性は非常に薄いものとなっている。このような夢の巧みな舞台まわしの効果により，「夢と現実との境界はぼやけており，もれやすい」(JB, Ⅵ, S. 354.) ものとなった。従ってこの物語は夢でもあり，現実でもあるのだ。それはまさにヨゼフ自身の性格が夢と現実をごっちゃにする特質をもっていることによく似ている。とにかく「夢はこの物語では決定的な役割」(JB, Ⅳ, S. 360.) を演じている。

ここで物語の内部にいる者であり，又同時に外部にいる者であるヨゼフのエジプトに対する態度を考察してみよう。ヨゼフはエジプトの内部にありながら，又その外部にもいたのである。イスラエルの民であり，精神的存在たる父ヤコブ (Yakob) の存在を常に忘れなかったから，ファラオの廷臣ポティファルの妻ムト—エム—エネト (Mut—em—enet) の肉の誘惑にも負けなかったのである。このように常に距離を置く態度は，イロニー (Ironie) とかフモール (Humor) に不可分に結びつく。従って二重のものの対応を同時に見る力は，この距離を置く態度を招くのである。初期の「トニオ・クレーガー」(1903)などの短編群に展回されていた市民対芸術家の対立は，この作品ではエジプト人対イスラエル人という形で，微笑とユーモアの内に柔かく統一される。「エジプトの人達も又現実家であった。ヨゼフは彼らの民族的慣習の嫌悪をおよぼすような上品さに対し，彼の血がもつ宗教的イロニーを向けながら，彼等の現実主義には好意的な寛容さと，距離をおいた眼とをもってこれを眺めた」(JB, Ⅵ, S. 300.)。「この思想に対して十分に距離を置き，個人的にそれに導かれていても，同時に微笑を浮べながら，——これは純粋さとユーモアとが一体化したものとい

うべきものであった」(JB, Ⅴ, S.313.)。「ヴェニスに死す」のアッシェンバッハの死も，この距離を置くイローニッシュな態度を忘れた為に起るのである。

天上からの祝福と地上からの祝福を同時に受けているヨゼフに対しても，作者は愛しつつも批判をするという態度を忘れてはいない。というのもこの物語の最後のクライマックスである父ヤコブのヨゼフに対する祝福は宗教的なものではなく，世俗的なものになったからである。そのことは父ヤコブより，母ラケルの血の方が多いことでも明らかであった。「ヨゼフは魅力的な母親の血を余分に受けていて，父ヤコブより明るく，のんきで――精神遺産が父の中に現われた時の形である悩み，心痛，動揺などを完全に理解せず，承認しなかった」(JB, Ⅲ, S.46.)。そして又「より深い状況などを考慮せず，純粋に効果だけを目的とする精神」(JB, Ⅲ, S.66.) が支配していた。

ヨゼフの一生は父ヤコブがいうように「聖なる遊び」(JB, Ⅴ, S.537.) である。そして又ヨゼフの愛は「否定的な愛」(ibid., S.505.) に終るのである。この両方の言葉からも，愛とイロニーとフモールに満ちた二重のものの対応が感ぜられはしないだろうか？　トーマス・マンの作品では，この憧れつつも実現出来ず，批判しつつも愛するといったイローニッシュな態度が，多彩な形をとって，くり返し，くり返し現われ出でているのである。

〔Ⅳ〕

前回の論文で「魔の山」と「ヨゼフとその兄弟たち」が＜Zeitroman＞であることはすでに述べた。所でここで考えてみたいのは物語を進行させる為には何が必要かという問題である。物語が進む為にはまづ変化がなければならない。その変化をもたらすものは時間なり，空間なのである。「魔の山」では場所は療養所ベルクホーフに設定されている為に，空間的には場所は一カ所に限定されているので，変化をもたらす為には時間が大切となる。それ故この物語では時間体験にもとずく主人公ハンス・カストルプの内的経験が重要な要素となっている。従って「魔の山」で時間を取り上げたのには，時間を論じようという積極的な理由のみならず，物語の進行の為という消極的な理由も存在したのである。それに対し「ヨゼフ物語」においては事情は若干異なる。というのも「ヨゼフ物語」にはすでにして語られた物語が聖書の中にあるからである。とすれば存在する物語をどう解釈して新しい物語とするか，という解釈の自由しか作者にとって残らなくなる。「語り手がそのような正確さに近づく為には――忠実に生の性質に仕えることによってである」(JB, Ⅳ, S.342.)。その際時間に重点を置くか，空間に重点を置いて解釈するかが重要な問題の一つとなる。明らかにトーマス・マンの方向は時間に向けられている。確かにこの「ヨゼフ物語」ではイスラエルからエジプトにという場所の移動が存在するが，そのエジプトは具体的な場所としてよりも，死者の国という風に定義づけられており，抽象的なものに変えられている。教養的な生→死→生に至るという一つの予定されたコースにある段階にすぎないのである。エジプトはあくまで＜死＞なのであって，人々や文化や経済は重要ではない。新しき未来の為には一度死なねばならないという＜死＞なのである。

従って両作品を通じてこの時間は，一方ではハンス・カストルプの内的体験の進歩と不可分になっており，他方ではエジプトという具体的な場所を死者の国という抽象的なものに転化する手法と堅く結びついている。いずれにしても両者において，この時間は観念的，抽象的なものに導く大きな働きをなしているといい得るのである。それ故時間問題が，単に物語

構成上重要であるだけでなく物語の内容の思想の点からも又重要なのである。

このような時間問題に対するトーマス・マンの関心が，更に教養的なテーマと結んで完成されたのが，「ヨゼフ物語」で達成された神話形式なのである。<神話の市民化>とはこのような意味を含んでいる。

所で今この両作品と，ゲーテの教養小説である「ヴィルヘルム・マイスター」(1796, 1821, 29) と比較してみたい。主人公ヴィルヘルムは彼の理想を現実のこの世界で実現しようと努力している。その為に色々な土地を遍歴するのである。これらの土地は決してトーマス・マンのように，生とか死とかといった抽象的な概念をあらわすものではない。従って本来旅がもつ空間的な要素と堅く結びついている。その為それらの土地としっくりと結ばれているので，距離を置いてイローニッシュに眺める手法は必要はない。大ざっぱな定義をするのを許していただけるならば，トーマス・マンの両作品を時間小説とするならば，「ヴィルヘルム・マイスター」は空間小説といえるのである。とすると当然次の問題が生じる。それは，ゲーテにあっては教養小説が<空間>と結びついているのに，トーマス・マンにあっては，どうしてそれが<時間>と結びついているか，である。

考えられることは第一には時代の状況である。19世紀の楽観的な進歩主義に対する反動は，ニーチェの時間の円環化，フロイトの無意識世界への接近に見られる。その結果未来に対して，進歩に対して，つまり直線としての時間に対しての希望がなくなってしまった。人々は意識の分裂，ニヒリズムの状況に巻込まれてしまった。20世紀はそういう時代なのだ。このような時代にあって，こういう状況の渦の中にあって，新たに未来への希望を取り戻す方法があるとしたら，一体どんな形によってであろうか？　その為には，まずこの現実の時代の状況から離れて，距離を置いて眺めるという手法が必要となる。そのことが一方では「魔の山」でとられた手法，徹底的に時代の病根を取り出し，そこから時代の否定的形態を描きつくすという方法である。このような否定的形態をとる人物の形象化は，トーマス・マンの作品では数多くみられる。狂気になる「ファウスト博士」(1947) のアードリアン，詐欺師である「フェリックス・クルルの告白」(1954) のクルルなどである。又他方において「ヨゼフ」に見られるやり方，遠く過去に飛び，そこで普遍的な形である<原型>を見出す手段である。例えば「ヴァイマールのロッテ」(1939) には実在したゲーテという原型がある。

第二にはトーマス・マン自身の素質と性格である。生立ちからして父方と母方の性格の違う血をもっているが故に，まさに彼は二律背反の原罪をもって生れたと言える。彼の作品には絶えず，色々に姿を変えるとはいっても，市民対芸術家，生対精神の対立がみられる。初期の作品では二律背反の一方のみに立つが故に，両者の合一はみられなかった。所が「魔の山」では両者の中間に立つ主人公を設定した。「ヨゼフ物語」ではそれが更に仲介者となる。二重のものの対応を同時に距離を置いて眺める者の設定である。

つまりトーマス・マンの教養小説が時間のテーマと密接に結びつくのは，一つには時代の状況から距離を置き，過去の回復から新たな未来を再び見出す為であり，又一つには彼の素質から分るように，二重のものの対応を同時に見る為である。

従って教養的テーマと時間のテーマの合一をはかるトーマス・マンの神話形式は，良きにせよ悪しきにせよ，<距離>を置く方法をとらざるを得ない。すでにトーマス・マンは「魔の山」を二重の意味で<時間小説>といい，一方において時代の状況が，他方において時間

が，問題になるといっているが，20世紀の問題意識という点から考えれば，「ヨゼフ物語」は時代の状況と遠く離れすぎるという恐れが生じる。その点「魔の山」では時代が，デカダンスの状況という否定的な形であるにせよ，良く描かれていた。「魔の山」でいわれた時間小説の概念からすれば，神話形式の時間小説である「ヨゼフ物語」は時代の状況が問題視されていない。それ故ヨゼフの一生が「聖なる遊び」であり，エピソードであるように，この物語も又「聖なる遊び」に終る運命にある。このことは又トーマス・マンの神話形式の時間小説の限界を示していることにもなる。20世紀の教養小説の限界といっても良い。教養小説が<時間>と結びつかねばならないという所にその原因を見つけることが出来よう。そしてこの後に神話形式からみれば，破壊である「ファウスト博士」の登場をみることになる。従って神話形式の完成の為のものである<時間>が，又神話形式の限界をも示すという皮肉な結果になるわけである。

注

(1) Käte Hamburger : Der Humor bei Thomas Mann, Nymphenburger, S. 163.
(2) 前回論文
(3) Harry Levin : Joseph the Provider, The stature of Thomas Mann 所載, New Directions, p. 214.
(4) 前回論文
(5) JB, Ⅲ, S. 28.
(6) Hermann Stresau : Thomas Mann und sein Werk, S. Fischer, S. 164.
(7) Zeit und Werk 所載, Joseph und seine Brüder, S. 449.
(8) Zb, S. 230.
(9) 前回論文
(10) JB, Ⅲ, S. 582.
(11) ibid., S. 583.
(12) JB, Ⅳ, S. 35.
(13) Brief an Karl Kerényi, 24, Ⅲ, 1934, Altes und Neues, S. 738.
(14) Helmut Koopmann : Die Entwicklung des ‚intellektualen' Romans bei Thomas Mann, Bouvier, S. 160. 参照
(15) Herbert Lehnert : Thomas Mann—Fiktion, Mythos, Religion, Kohlhammer, S. 105.
(16) JB, Ⅲ, S. 535.
(17) ibid., S. 540.
(18) Der Tod in Venedig, Erzählungen, S. 456.
(19) 前回論文
(20) H. Koopmann の前掲論文, S. 159.
(21) 前回論文
(22) JB, Ⅲ, S. 115.
(23) ibid., S. 284. 以下
(24) JB, Ⅴ, S. 164. 以下
(25) Hans Eichner : Thomas Mann, Francke, S. 64.
(26) Klaus Schröter : Thomas Mann, rororo, S. 114.
(27) JB, Ⅴ, S. 477.

Thomas Mann 全集は Aufbau 版による。
JB = Joseph und seine Brüder
Zb = Der Zauberberg
AG = Adel des Geistes

Das Problem der Zeit in Thomas Manns „Joseph und seine Brüder"

Tsuneo FUKAZAWA

„Joseph und seine Brüder" ist ein Zeitroman wie „Der Zauberberg" und ein Mythos. In den Josephsromanen versucht Thomas Mann die Vereinigung von Mythos und Tiefenpsychologie. Das Mythische ist für Thomas Mann das Immer-Wiederkehrende, Zeitlose und Typische.

Im „Zauberberg" sind die Zeit als Strecke und die Zeit als Sphäre thematisch, aber eine Grundthema von „Joseph und seine Brüder" ist die Zeit als Sphäre. Die Sphäre besteht in Ergänzung und Entsprechung, sie hat das zeitlose Geheimnis, *dass, was oben ist, auch unten ist, was aber im Irdischen vorgehen mag, sich im Himmlichen wiederholt*" (JB, S. 186.).

Joseph wiederholt die Lebensform seiner Vorgänger in der Götterwelt. Es ist der Tammuz-Osiris-Adonis-Mythos, den er mit der Stufe von Tod und Auferstehung imitiert.

Die grosse Absicht Thomas Manns ist es, den Mythos zur Humanität zu leiten.